

令和6年 宇美町消防団出初式 町長式辞

新年、明けましておめでとうございます。

令和6年の新春を迎え、本日ここに、伝統ある宇美町消防団出初式を挙げるにあたり、一言ご挨拶を申し上げます。

来賓各位におかれましては、公私何かと御多用にもかかわらず、多数ご臨席賜り厚く御礼申し上げます。

さて、元日に、石川県で最大震度7を観測した能登半島地震において、お亡くなりになられた方々に哀悼の意を表しますとともに、被災された方々に心からお見舞いを申し上げます。

昨日までにお亡くなりになられた方126名、安否不明者210名と、大変な惨事になっております。

発生から一週間が経つわけですが、被害の全貌はいまだ見えておらず、陸路や通信の寸断による救助の遅れは深刻となっております。自衛隊、消防、警察による行方不明者の懸命な捜索が続いておりますが、奇跡が起こることを祈るばかりであります。

1月5日の読売新聞に、次のような記事が掲載されておりました。見出しは、「消防団員 がれきの下に祖父母残し」。

70歳代の祖父母が自宅に閉じ込められたままの消防団員も、連日、不明者の捜索を続けている。

普段は建設会社で働く石川県珠洲市の長谷川真さん(24)だ。自らも避難所で生活しながら、昨日も朝から集落を歩き続け、がれきの下に生存者がいないか見て回った。

長谷川さんは1日夕刻、最初の揺れに見舞われた直後に出動した。

長谷川さんの消防団では震度5以上の地震で招集される。数分後、再び激震が襲った。「近所の家が次々と折り重なるように崩れた。自分の家も大変なことになると思った」

木造2階の自宅で祖父母と母との4人暮らし。慌てて戻ると、崩れた家屋の下敷きになった母は自力で脱出して無事だったが、1階にいた祖父母は屋根の下に閉じ込められていた。

「ここにおるよ」。がれきの下から祖父の声が聞こえた。ほどなくして大津波警報がけたたましく鳴った。

「自分一人の力では助けられない」。泣く泣く高台にある避難所に向かった。

自宅には津波が押し寄せたが、夜に戻ると暗やみの中、衰弱した祖父母の声がまだ聞こえていた。チェーンソーを使って柱を切り、祖父の顔を確認することはできた。だが、その時には息をしていないように見えた。

祖父も消防団員だった。地区の安全のために活躍する姿を見て、消防団員に志願した。

地震の発生当日から消防団の仲間と力を合わせて住民の救出や消火活動にあたり、自衛隊員や静岡、滋賀県など遠方から駆けつけたレスキュー隊員と一緒に安否確認を続けてきた。

だが、激しく潰れて重機がなければ救出作業が難しいことから、自宅は手つかずのままだ。

「じいちゃんにはよく学校まで車で送ってもらった。ばあちゃんには、おいしいご飯を作ってもらった」。思い出が次々ときみ上げる。

「じいちゃん、ばあちゃんを運び出してあげたいが、つらい思いをしているのは自分だけではない。一人でも助けられる命を助けたい」。自らを奮い立たせながら現場に立ち続ける・・・。

皆さんと同じ消防団員の長谷川真さんの記事を紹介させていただきました。

住民の生命・財産を災害から守り抜くという強い使命感を持ち、地域の安心・安全の確保のために日々活動している末継団長以下、宇美町消防団員の皆さんだからこそ、多くを語らずとも、長谷川さんの気持ちを一番理解できるものと思います。

目の前に整列した団員の毅然とした姿勢と、士気盛んな勇姿は、本町の消防行政を預かる者として、誠に頼もしく、力強く感じております。

町行政を預かるものとして、引き続き、地域防災の中核である消防団の装備の充実、教育訓練の実施、処遇改善に積極的に取り組む所存です。

消防団においては、災害に強いコミュニティづくりの中心的な役割を担っていただき、いつ起こるかわからないあらゆる災害に強い宇美町の実現のため、より一層精進していただきますよう期待しております。

結びに、宇美町消防団の益々のご発展と、ご臨席の皆さまのご健勝を心から祈念申し上げ、本日の式辞といたします。

令和6年1月7日 宇美町長 安川 茂伸